

〔皇大神宮儀式帳〕亦種々、乃事忌定給<sub>支</sub>、○病<sub>乎</sub>慰止云、

〔延喜式<sub>五</sub>〕凡忌詞、内七言、佛稱中子<sub>中</sub>、○外七言、死稱奈保<sub>ホ</sub>留<sub>ル</sub>、病稱夜<sub>ヤ</sub>須<sub>ス</sub>美<sub>ミ</sub>、○下

〔運歩色葉集<sub>久</sub>〕歡<sub>ウツシ</sub>樂

〔年々隨筆<sub>二</sub>〕やまひを歡樂といふは、死喪を吉事といふごとく、凶をさけていへる也、五六百年こなたの記録どもに、常にみゆ、去年の秋、萩の花さかりに咲みちて、池水にうつろふがをかしきに、月さへをかしき比なりければ、稻山行教、清水良治などにせうそこしてまどゐしたり、酒いたうす、みて、むらいもさりあへず、歌よむもあり、すゝなる朗詠などしてもて興するほどに、亥の時もはやう過にけり、良治はかへりぬ、行教も正明も酔ふしぬ、又の日はかしらいたくおきあがるべうもあらずくるしければ、昨宵歡樂生、歡樂とかきて、良治がりやりつれば、昔日聖賢昧、聖賢とかきそへて、やがておこせつ、聖賢とは酒の事也とぞ、

〔玉勝間<sub>一</sub>〕年始に病を歡樂といふ事

東鑑云、承元二年正月十一日云々、依將軍家御。歡樂。延及今日、今の世にも、年のはじめには、病といふことをいみて、御歡樂といふならはしのこれり、

〔玉勝間<sub>十二</sub>〕としの始に病を歡樂といふ事

園大曆に、貞和二年正月八日の所に、予風氣相侵、仍歡樂。之間、不及出座と見えたり、病を歡樂といへること、これよりさきの物にも見えしやうにおほゆ、

〔蔭涼軒日録〕寛正四年十二月五日、當寺<sub>○相都聞依</sub>歡樂。而退之事、自方丈被申分披露之、

〔二水記〕永正十七年十一月十九日、早旦參當番、初雪、御盃如例、伯三位依歡樂。不候、各沈醉、不可説也、

〔蜷川弓馬故實〕松本ハ生害させず、歡樂ニテ死去也、

○按ズルニ、此等ノ文ニ據レバ、病ヲ歡樂ト云フ事、必シモ年始ニ限ラザルガ如シ、